死のよろこび

歌集

死のよろこび

横瀬虎壽著

石蒜社
MCMXV

初版五百部ノ内 號 293

たゞ死こそは神の名譽なれ

——ボドレエル「貧者の死」——

死のよろこび 目

母
名
悼
蛇
彼岸花

髮
とくり蜂
髑髏の歌
一　金扉の乳
二　羊のごとく
三　翡翠
月暈

母

忍従の三十年は過ぎけらしうら切
り人に母をかぞふる

II

母を見れば心ぞ和(ミニ)む老の目に死な
じとわれをはげますからに

天が紅(べに)虹と流るる夕ぐれはわが死ぬ時と人にこたへむ

IV

蕪菁虹は海の嵐の兆てふわが死よ

來れ天つみ空ゆ

V

大方の人は背きぬ掴(つか)むべき毛の一
すぢもわれはもたらず

VI

われにしては死のよろこびとなら
めども×勝江が髪の燒くに悲しき

×勝江は從妹なり。慶興にて死す。

VII

寂しさは十人の戀を見つれども紛(まぎ)れぬものか涙の流る

VIII

少女等の立つる誓ひは笹の葉の黒(くろ)
鵐(じ)の小水(しと)に値(あたひ)せむかも

IX

×龍燈鬼鬼の挑(かか)ぐる灯をだにも點せ
や暗きわれの小(を)床に

×龍燈鬼は岡寺にあり。高さ三尺。鬼の角にて捧げたる燈籠。

X

一人在る日一人在る夜を見守れば
ゐゐしや鬼の点火怠る

XI

夢の終り戀の終りとなりにけりう
とましかくて猶も生くるか

XII

わが涙血となりて落ちむあまりに
も賊(そこな)はれてし心なるゆゑ

少女等はわれより長き指もてり曲(ま)
ぐれば撓(しな)ひ吸へば血滲み

XIV

日暮るれば開(あ)く蝙蝠の眼の如く海
に吸はるる我心哉

XV

一人だに泣かば足りなむわが母の
愛(か)しとだに泣かば命足りなむ

XVI

母し在ればかかる身ながら今日な
から死なぬ命となほや思はむ

名

漢服文といふ名を十年秘めて今こそ命くれ人の初子に

えらばれしこれの名親は若草の妻
だに無きをいかゞ悲しぶ

XIX

無宿者(あぶれもの)天が下には妻も無し夢に見
し子の生れ出でむや

われ子生ばつけむと思ひし日の本
の一のよき名を人にくれけり

悼

XXI

若草の妻もえ覓(ま)かず死にければ寂
しとぞ思ふ久(く)自(じ)の男も

XXII

秋し来れば紫苑の花のけぶるをも
知らめや君は根の下にあり

蛇

XXIII

蛇よわが痿えたる足を嚙めかしと
招げごとよらず女ならねば

XXIV

毒だみの花を壇(うてな)に築き上げて祭れば甦(い)くる蛇なりけらし

XXV

妹等(いもら)がり今宵忍ぶらむえ男の足し
喰(は)めやと蛇を捨てけり

XXVI

毒蛇よわが床に爬へ汝を見る夢の
うちだに戀を忘れむ

彼岸花

XXVII

曼珠沙華秋は枯れにけり爛れたる
われの心も癒えむとすらむ

XXVIII

馬骨燃えて燐の飛びけるかさ藪や

野篠の中に咲ける曼珠沙華

XXIX

心灼く日となれりけり曼珠沙華苦

き球もが睡求めむ

XXX

曼珠沙華花は火を噴く球ながら苦
きを喰(は)まば眠來らむ

XXXI

苦(ねもころ)に人を思へば曼珠沙華秋は心に
燒きつく花か

XXXII

暫くは逢はじと告ぐる人の目に曼
珠沙華咲かば悲しからまし

XXXIII

一瓣(よ)は君の一瓣はわれの彼岸花心

爛(ただ)らす花は彼岸花

髮

しんじゆしませうか髪きりましよか
髪は生へもの身はだいじ

XXXIV

盗人よ錢を與へむ今宵いんで宮城
少女を取りて歸り來

XXXV

夢朝朝髪を忘れぬ悲しさに先行方
無き櫛を探るか

XXXVI

嫁がざる女も無きをとりわきて君
に流れし涙のをしく

XXXVII

人戀の涙教へし君なればうづめが
母のわれに泣くらむ

XXXVIII

荒陵と心はなりぬ君を思ふ涙は土
にうづめてしもの

XXXIX

君のみは常久のをこめに生くらむ
とかつて思ひき今も思へど

XL

撓(たわ)つかば櫛を吾手にとらしめて梳
かむといひき今も言ふやも

XLI

平打をささしめむ日も亡びけり髪
切りし日は君の去りし日

XLII

赭(あか)ければ愛(を)しとだにあらずしかす
がに涙にしめす髪のあぶらよ

XLIII

箱枕いまだなれねばピンおちてわらはめくらむ曉の髪

XLIV

紫の打紐(うち)ながら纏(まき)きつれば髪は丸
がれぬ夢に泣きけむ

XLV

君が髪見れば母さへ泣くものを鬘(かもじ)
に賣らむ酒に代へてむ

XLVI

母よりも君をば愛(を)しと思ひつる戀
の猛(も)者(さ)なれば命生きけれ

XLVII

天地に侶なきわれの悲みもかつは
思はむ戀ざめの人

彼の女等清く終れとわれにいふを
忘れしも無し嫁がぬも無し

XLIX

空洞(うつろ)めく心ながらにわが待つは君
が嫁ぎを知らせくること

たとへ汝王の后と徴さるとも跪く
べきわれと思ふや

磯館涙のうねりの近き夜は靜に眠
れ明日は眼さめむ

とくり蜂

蜂の子になれなれ青の尺とりは蜂
の巣のみはよう取りもせぬ

尺蠖(しやくとり)は蜂の巾し子木の子(み)なす土の
徳利に蜂と睡れり

尺蠖よ這ひ出でて空の青を見よ土
の德利に蜂とあらむより

LV

尺蠖はおぞの蟲哉蜂の子の劒守り

て蜂と眠れり

LVI

徳利蜂われに言へらく尺とりはわ
がほこ刺すをよしと思へり

髑髏の歌

一　金扉の乳

LVII

生れしは京の白河京の水産湯に汲
みて肌の匂へる

LVIII

捨てらると知らで開けけむみごり
子のまづ見しものは母の目なるを

LIX

地もぐりの蹠(かかと)嚙むとか夢みけむわ
れを捨てたる母の苦しみ

LX

白河の在(ざい)にやらはれしあつけ兒は
べこ呼ぶちいが聲になれしか

LXI

母無し子の母戀しとにあらねども
金扉(かなど)の乳を泣きて吸ひけり

LXII

最上川最上がくしの霧はれて船行くなべにいろは倉見ゆ

LXIII

母の目をはかる聰(さと)さは預け兒の小
さき胸にも有(も)ちてしものを

憎まれて十年すぎければ京訛忘れて出羽の少女となりし

LXV

火もえづる柘榴の子を吹き打たむ
母の閉てたる鐵の戸に

LXVI

不圖見しは山かがしめく蛇の目と
夜の鏡に影ひく帶と

懷かしや廊下の壁に泣いじやくり
指もて書きし梵字羅馬字

二羊のごとく

LXVIII

あばかれて足蹴せられし尸の白き
を見ずや君の戀なり

LXIX

針を刺す痛みにありし君が名もわ
が心よりはなれ行く今

LXX

けびゐ使のをさも知らじな血にて
捺しし君が指紋(しもん)の美しき文(あや)

LXXI

見おこしし痛き瞳よ君が目は茨の
ごとくわが目にとほる

LXXII

瑠璃越に今宵の人を見むものか水
の中なる花にもあらぬに

LXXIII

柔かう伏せる眉かなでつれば睫
毛うるみて火をまぶしがる

LXXIV

雪ちらちら乳あらはなる懐に羊の
如くいねむ夜もあれ

LXXV

ふところの石の髑髏を取らしむと
衿をゆるむるきぬのきしめき

LXXVI

髑髏ぞと今はいへごもなほ生くる
君が面わの花と匂ふも

LXXVII

解くは七重袴の下のしづり帶細き
を耻ぢてうつむきし人

LXXVIII

おなじ腕おなじ唇ゆるしけむ君を
ぞ思ふ涙おつれど

LXXIX

君が書ける戯曲の終り知らしむと
われに取らせしいしのごくろか

LXXX

一人生き一人死ぬるをあはれみて
髑髏に示す戀の假面(おもて)かな

LXXXI

枕べに剣を置かむか足のへに香を
炷(た)かむか夢のあやふき

LXXXII

火食鳥二夜さながら火をくひて髑
髏の上におくとみしかな

LXXXIII

ある時は君とありける水の上の鵠(くぐひ)
の羽の白き夢とも

LXXXIV

わが歌も終(つひ)の命となりにけり髑髏
よ酒をいで呑ませんぞ

LXXXV

憎きものに思ひなしぬる君なれど
海に入れとは念(おも)はざりしを

LXXXVI

南に伊豫が嶺見せて燧洋桃色の海
は君を呑みけむ

LXXXVII

絺(きぬ)だゝみ吉備が鼻より敷き設(ま)けば
落つとも潮は騒がじものを

三尺とのびて五さかの髪にか
へらば人のつかまむ
ななたりの女やくしやに弄ばれてまた懲
りずまに君を見しかな

LXXXVIII

忘れめや火の矢火の雨ふると見て
夢にして悔いし涙それさへ

LXXXIX

羨まし弓削の小島の白水郎一人海
に入り行く君を見にけり

XC

猿澤の池の玉藻やは君が爲し入毛
のごとも脫ちて流れし

嫁入を人間(ひと)にはせじと曉の海に投
げしやひすゐの挿頭(かざし)

海が見し堆鴉のもとごり海が見し
舞鸞の鬢は吾思妻

XCIII

わが見し日肌にまことひし樺色のは
たぎの色も朽ちけむか潮に

XCIV

絞れども絞れども干ぬ髪に枕して
のがれ來し海の鳴るをきくらむ

XCV

よしや今は君をかへせる賂(まひ)なれば
翡翠の挿頭(かざし)海にやるとも

XCVI

ダアリヤの咲きし月こそ嬉しけれ
海の少女のかへり來し月

XCVII

夏の日は靈(くしび)なるかな空にもゆる炎(ほのほ)
の中にわれ等を生かす

月

暈

XCVIII

長瀞(ながとろ)の小戸に水堰く圓石(つぶらいし)其つぶら
石わが夢に鳴る

XCIX

月暈(かさ)も沼の光も白き夜はみそかに
開く睡蓮の花

C

命かな　月（ささらえをとこ）海行く夜沼隈（ぬくま）の浦に

こほろぎを聞く

大正四年十二月十二日印刷
大正四年十二月十五日發行　　定價金六拾錢

著作兼發行人　茨城縣眞壁郡大寶村大字横根七番地　横瀨虎壽

印刷人　東京市小石川區音羽町三丁目三番地　國仙和吉

印刷所　東京市小石川區音羽町三丁目三番地　玄光堂印刷所

發行所　茨城縣眞壁郡大寶村　石蒜社

發賣所　東京市牛込區西五軒町卅五番地　天弦堂